

音楽室から地域へ、子どもたちが動き出していく授業 — 単元「M先生へ日本の音楽をプレゼントしよう」の実践を通して—

愛知県

1. 本校の考える音楽科の役割

毎日、新聞やテレビをにぎわす音楽の記事にはモンゴルの馬頭琴、アフリカのジャンベなど、西洋音楽以外のものも多く紹介されている。めまぐるしく変化する社会情勢と同様、私たちの音楽的環境の多様化もとどまることを知らない。国際化、情報化の波に乗り、テレビ、ラジオ、インターネットなどで世界各国の音楽がすぐ手に入るようになった。

一方、他国の文化を理解すると同時に、自国の文化を見直そうと、日本の音楽も頻繁に話題に上るようになってきた。三味線、尺八、和太鼓などを演奏に取り入れ、楽しむ若者たちもいる。雅楽の東儀秀樹や三味線の吉田兄弟ら、新進邦楽家たちの活躍が追風になっているともいえる。また、ヒーリングミュージックのように、日常生活におけるリラクゼーションとして音楽に価値が見出されている。医療やリハビリの分野では、音楽療法というかたちで音楽が見直されている。今や、明治以降、西洋音楽が主流であった学校教育は大きな転換期である。

このような社会風潮のなか、中学生の子どもたちも、友達とバンドを組んだり、家族とカラオケをしたり、好きな曲のCDを買い集めたりして、自分なりに音楽とかかわっている。しかし、ごく限られたジャンルを受け身的に楽しんでいるともいえる。生まれたときから音楽に慣れ親しんでいるとはいえ、世界中にある多種多様な音楽から比べれば、微々たるものである。

子どもたちには、より広い視野と柔軟な感受性で世界中のあらゆる音楽をとらえ、音楽を通して自分らしく楽しむ力を育ててほしい。さまざまな音楽にはそれぞれの特徴があり、楽しみ方もいろいろである。このような楽しさを求めようとするとき、身近な人ばかりでなく、これまでの伝統を築いてきた人々や他の国の人々とかかわっていくことができる。そして、これまでの経験や、今ある知識、技能を最大限に生かして他とともに新鮮な楽しさを見出し、分かち合うことができる。

このような考えから、子どもたちがよりいっそう主体的に音楽の楽しさを求め、ものの見方・考え方を広めたり、深めたりするようになることを期待している。

2. 音楽科で育てたい子どもの姿

子どもたちは、これまでの経験から培われた音楽への思いや知識・技能と、自分のまわりの人・こと・ものを結びつけることによって「音楽の楽しさ」を味わうことができる。これを原動力として、さらに広い視野でアプローチしていき、より美しい音色に気づいたり、表現豊かな曲想に感銘を受けたりすることができる。いっそう高次の「音楽の楽しさ」を体感することができる。

音楽の授業での学びをきっかけにして、生涯にわたり、音楽の楽しさを探し求め、十分に味わい、豊かな情操を自ら養っていくことを願っている。

1) さまざまな音楽に耳を傾け、自分なりのかかわり方を見いだそうとする姿

さまざまな音楽に接し、新たに出会った音楽とこれまでの経験や知識・技能とを結びつけて、音楽に対する思いを広げたり深めたりしようとする。

2) **さまざまな人と音楽活動を楽しむことにより、表現の豊かさや美しさを感じとったり、創造的に表現したりしようとする姿**

専門家に知識や技能を求めたり、友達や学校以外の人々とともに音楽活動をしたり、また、自分の思いを声、音、身体表現で人に伝えたりすることで、他とかかわりながら自分の音楽を高めていこうとする。

3) **感じとった音楽への思いや習得した技能・知識を生かして、より豊かな表現を求めようとする姿**

音楽活動をふり返り、さらに広く音楽にかかわろうとしたり、学びの中で得たものを生かしたりすることで、日常生活をより豊かにしていこうとする。

3. **教科カリキュラムの構想と編成**

音楽科におけるめざす子どもの姿を実現するため、次の3つの要素を考慮して教科カリキュラムを編成した。どの学年も、1学期は仲間づくりと雰囲気づくりを大切にしている。それにより、心が開かれた学習集団の中で2学期の学習が展開され、ともに学び合う喜びを味わい、「音楽の楽しさ」を体感する。3学期は、1、2学期で培った音楽への思いをあたため、さらに表現力を高めることができるようにした。

◇身近な音楽から出発し、さまざまな音楽とかかわる

日本を含めた世界中のさまざまな音楽に出会うことで、再度、身近な音楽を見つめ直したり、音楽の魅力を探ったりすることができるようにする。また、このような活動がより主体的になるよう、日常生活から問題意識を掘り起こして興味・関心を引き出し、少しずつ追究対象を広げていくようにする。

◇音楽を体で感じとる

体全体で音楽を受けとめ、つくりあげていく音楽こそが感動を生み出すと考え、体全体を使って表現する醍醐味を味わえるような単元を位置づける。このような活動には表現と鑑賞が表裏一体となって織り込まれるので、子どもたちに、自分の表現も他人の表現も集中して耳を傾け、体全体で受けとめられるような感性の高まりを求めることができる。

◇個が基盤となる集団表現を体験する

個の思いや表現を大切にし、音、声、身体表現で交流していく活動を単元に織り込む。さらに、子どもたちが一人一人の思いや表現方法を主張することによって、よりダイナミックで感動的な集団表現が生まれることを実感できるようにする。このような体験を通して、子どもたちがさらに豊かな表現を求めて積極的に追究していこうとする気持ちが高まる。

学期	1年生 (35時間)	2年生 (35時間)	3年生 (35時間)
1学期	<p>【新しい仲間】 新しく出会った仲間とうちとけ、ともに表現し合うことの楽しさを味わう。(12)</p> <p>声や音を合わせることで仲間意識が育つ。みんなで歌える愛唱歌をもつ。</p>	<p>【音楽にのってⅠ】 音楽にのってダンスで表現する。(12)</p> <p>体を動かすことによって、活気のある学びが展開できる。学年の最初に前向きな学習の雰囲気をつくり上げる。</p>	<p>【音楽にのってⅡ】 音楽にのってドラマで表現する。(12)</p>
2学期	<p>【耳を澄まして】 身近にある音やリズムに耳を傾け、それを再構築して音楽</p>	<p>【世界の音楽Ⅰ】 西洋音楽とは異なるリズムや響きにふれ、新たに音楽の楽し</p>	<p>【世界の音楽Ⅱ】 世界中の音楽からその特徴をつかみ、自分なりの楽しみ</p>

この資料は、「**授業ですぐ使えるシリーズ HDD 版音楽科教育実践講座**」に収録されている資料の中から、一部抜粋したサンプル資料です。

本資料が収録されている商品については、株式会社ニチブンのホームページをご覧ください。

<http://www.nichibun.com>